

5 価値観が転換した

情報は正しいのか？何を信じて避難生活を過ごすべきか、とても悩むが、どのように将来設計するのかを考えることが大事である。その情報を、最後は自分で判断するしかない。

学校現場は、学校によってかなり対応が違う。**自分のところの子どもがどうかを分析・判断することが、子どもを守るという面で重要であり、教師としての力量が問われる。**

6 子どもの教育の視点に立った復興復旧計画

「学校があってよかった。」という声を聞いた。今後は、**学校が地域の中でどうあるべきか。ただ単に教育という視点でなく、子どもたちの生活の中心である学校生活を考えていく必要がある。**

将来この学校を卒業したら、こうしようと子どもたちは考えている。学校生活の中での人生設計を、子どもたちは持っている。しかし、被災者の子の人生設計は大幅に狂っている。これは大変深刻な問題である。

避難所の親は、最後は「この子たちのために自分がかんばらないと」と言っていた。

子どもたちの支援を、支援の中核に据えないと、大人たちも元気が出ない。子どもは、家族あるいは地域社会にとっても明るい話題になる。

地元の小学生が、避難してきた小学生のケアに当たっている。これも大事である。これは、避難先の子どもの成長であり、人権教育になる。

これからは、カウンセラーの役割と同時に、学級全体、学校全体で受け入れることを考え、学校という「組織」として支援に動けるか。学校としての力量が問われる。

7 災害時における不適切な情報への対処

情報が複雑で、わかりにくい。情報に頼っていたので、かなりのパニックになった。**情報の適切な利用・活用が、私たちは大切である。どう対処するか、不確かな情報に振り回されないようにする。情報をどのように活用するのか、発信するのかを学ぶ必要がある。**

そして、命や暮らしを守るためには、自分自身が「どうするのか」「みんなとどうするのか」「行政がどのように支援していくのか」という、いわゆる自助、共助、公助のバランスのとれたベクトルが大事である。

8 東日本大震災から何を学ぶか

これからの日本が、どのような新しい社会に生まれ変わるのか、世界も注目している。これだけ深刻な事態なのに、日本人は受け身であるので、自ら情報を収集・分析する力が弱く、指示待ちである。**「自分ならどうするのか」ということをもっと議論すべき**である。

残念ながら、自分たちのことを自分たちで判断することが弱くなっている。自分たち自身の生き方が問われている。自ら考え行動することが弱くなっている。一人一人が何ができるかを考える必要がある。**自分を大切にするとともに他人を大切に作る社会を作りたい。**

〔講師のおもな著書・編著〕

「現代教育行政の構造と課題」（共編著 第一法規）

「学校改善と教職の未来」（共著 教育開発研究所）

「こうして使おう”学校評価ガイドライン”」（共編著 教育開発研究所）

「学校マニフェストをどう構想するか」（全12回の連載『学校運営研究』）

①全体講演「格差と貧困に立ち向かう教育 –人権の視点で問い直す–」

大阪教育大学理事 成山 治彦 先生

子どもの学力と家庭の経済状況が密接な関係を持っていることが各種学力調査の分析から明らかになる中、「貧困」等の「しんどさ」を抱える子どもの学力は低いままおかれてしまうのか。進路は「弱肉強食化」してしまうのか。

すべての子ども達に「生きる力」を付けることを目指す学校として、いま何が大切なのか、中学・高校の教員を経て、大阪府教育委員会教育監として学校教育・人権教育を牽引してきた成山治彦先生を招いて全体講演を行うとともに、課題別分科会を設置し、まとめには「公立学校の使命とは」をテーマとするトークセッションを置きました。



「しんどい子どもたち」に寄り添い、生きる意欲と力を育むことを優先課題として取り組んできた大阪の同和教育・人権教育の実践をもとに、「人権教育と学力の関連」、「誇れる学校づくり」、「問われる教師の生き方」等についての講演。

「しんどい」とは、教師にとって指導困難な子ではなく、生活背景に重い課題を抱えている子どもたちを言う。

1 今、子どもたちは

(1) 格差と貧困が子どもの学びと育ちを危うくしている。

豊かで文化的に暮らしている人とワーキングプアとに2極化し、社会からドロップアウトしてついていけなくなっている人が増えている。母子世帯等では、子どもを抱え働いていて、子どもを見てあげられないことも多い。福井・秋田県では三世帯同居で、祖父母が子どもの面倒をみる。これが学力に好影響を与えている。

(2) 格差と貧困が子どもの意欲と展望を奪っている。

高卒で就職する場合、求人倍率が1倍を切っている。年金、保険、生涯賃金等が違うのに、就職口があってもアルバイトと変わらない条件と思って、進んで就職しようとはしない。

大学進学したとしても新たな問題が出てきた。それは大学中退で、やり直せる率が非常に少ないということだ。

(3) 競争至上主義は挫折と絶望しか生み出さない。

秋葉原の通り魔事件では、犯人は中学校まではトップだったが高校でついて行けなくなって自暴自棄になったと報じられている。勉強ができないとだめ、いい大学に進学できなかったらだめという価値観しかなく、挫折や困難を自分で受容できない。

2 挫折や困難を乗り越える力

(1) 置かれた状況から逃げずに自己を見つめ、他者に自分の存在が認められ、つながる中で意欲が生まれる。

(2) 誇りと人間信頼は生きる意欲の源

テノール歌手の新垣勉さんは、出産時の医療ミスで全盲となったと言われている。青年期は荒れまくったが、一人の牧師に出会い、牧師がただ黙って泣きながら彼の話を聞いていることに気づいた。こんな自分のために涙を流してくれる大人がいるんだ。自分は最低の人間だと感じながら荒れていたが、受けとめられる大人がいるんだと気付くことで立ち直る機会となった。

3 教師の生き方が問われる

(1) 風評とたたかう誇れる学校づくり

教師として子どもに困難な話をするとき、乗り越える道筋を示してあげないと自暴自棄になる。誇りと人間信頼を与えられるかどうか、実際につながりを作れるかどうか教育に求められていることではないか。

(2) 子どもに向き合う（共感性）

課題を抱えた子どもの気持ちのすべてを分かるわけではないが、「あなたが言うことに真摯に耳を傾けるよ」と向き合うことはできる。教師が「本音と建て前」使い分けしては子どもの心には届かない。子どもと向き合い本音で人権問題を語れるかどうかだ。人権問題に出会って教師自身の生き方が問われる。

(3) 課題を抱えた子どもの「自立して生きる」

目の前にしんどい子、課題の重たい子がいなくても、心の中では目の前に当事者がいるんだと思って語りかけてほしい。話をすれば先生が理解してくれる、誰かが助けてくれるような、人権尊重の意識に満ちている教室をつくり、課題を抱えた子どもが笑顔で輝くような学校を作ってほしい。

〔参考図書〕

「格差と貧困に立ち向かう教育－人権の視点で問い直す－」 成山治彦（明治図書）

◎関連する教育実践の紹介

大阪府松原市立松原三中校区(以下、三中校区)に属する2幼稚園・2小学校・1中学校は、文部科学省の「人権教育総合推進地域事業」にかかる研究委嘱を受け、平成20年度から3年間にわたって、「心・技・知を結ぶ人権尊重のための実践的行動力の育成」をテーマに掲げ、11年間を見通した人権学習のカリキュラムづくりと指導方法のあり方について、5校園の協働した研究に取り組んできました。

三中校区の実践は、国の「人権教育の指導方法等のあり方について」〔第一次とりまとめ〕～〔第三次とりまとめ〕の具現化を目指したものであり、それはまず、人権に関する実践的行動力に関わって子どもたちがどういう状況にあるかという現状認識から始まり、「協働で育てたい6つの力(①自分や家族・地域を誇れる力、②仲間や他者に共感できる力、③理由や根拠をもとに気持ちや考えを伝え合う力、④違いを認め合い、差別や不正を見抜く力、⑤進んで学び、行動し、問題解決する力、⑥豊かな人権感覚と規範意識を持ち、人権尊重の社会づくりに参画する力)」の育成を追求して行われました。

その成果は平成22年11月、全国から1千名を超える参加者を得て行われた研究発表会で報告されましたが、このたび研究の指導・助言にあたった先生方を中心に以下の実践報告がまとめられました。

「感じ・考え・行動する力を育てる人権教育 大阪・松原三中校区実践」

成山治彦・志水宏吉編著

(解放出版社)

【おもな内容と執筆者】

- ・「人権教育の指導方法等の在り方について〔とりまとめ〕」(福田 弘)
- ・「知的理解と人権感覚を融合する」ほか(成山 治彦)
- ・「『力のある学校』づくりほか(志水 宏吉)
- ・「『法教育』の視点から知的理解学習を評価する」(橋本 康弘)
- ・「人間関係を通して個を育む」(西井 克泰)
- ・「三中校区の『生き方・共生学習』について」(高田 一宏)

